

現場と触れ合える

広島市政リポート

2023年 岁末号



冬晴れが心地よい今日この頃、皆さまご清祥にお過ごしでしょうか。

12月は、「師(僧侶)が経をあげるべく東西に馳せる月で“師走”と表す」といわれますが、かくいう私も「お蔭様」をもって、師走を実感する東奔西走の毎日を送っています。

ゆえに、日々の暮らしの中で自分を見つめなおし、周囲も見回す余裕を欠いている感は否めず、せめて「一日一止」(いちにちいっし)。一日のどこかで一息入れては、自らを省みる習慣を身につけたいと、今更ながら痛切するところ、いかんせん常に全力疾走なので、なかなか急には止まれません。猛省。

しかるに、この度の市政リポートは“活動の一片”に過ぎませんけども、いつものように情理を尽くし、心を込めて制作しておりますので、お時間の許す時にでも目を通してください幸いです。

結びに、皆さまの益々のご多幸と、何よりのご健康を心から祈念して。 広島市議会議員 石橋りゅうじ



Report 01

物事の本質を見抜く 議員に求められるクレンジング

私たちの広島市を知るうえで、まずは大局を見渡すべく“国政”に目を向けてみると、先頃、「税収増の還元」が謳われては、4万円の定額“減税”や住民税非課税世帯を対象とした1世帯あたり7万円を“給付”する政策案が打ち出されました。(※原稿作成時点)

そこで、私などが「皆さま！惑わされてしまいません！」なんて声高に叫ぶつもりはなくとも、こうした「国の税収増」や他にも「地方自治体の単年度黒字」などの見出しについては、いくらでも“お化粧を施せる”事実を踏まえておく必要があります。

例えば、前記“国の税収増”にせよ、**主要因**は「本国の経済成長等」ではなく、戦争など世界情勢の不安定化に伴う原油高、物価高の価格転嫁に起因した「消費税額分の増加」や円安も手伝っての「世界的なインフレ」にたどり着きます。

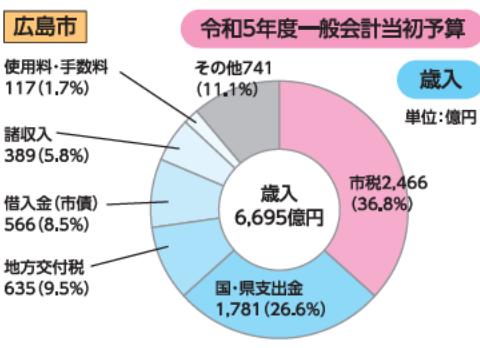
そこへ加え、税収のプラス要因には、補正予算で“先取り”して計上された額も含まれれば、他方、最終的に表れてきた「純余剰金」にしても、この半額を政府は「防衛費増額の財源として充てる」方針を示しており、私は、特定政党の批判や後ろ盾をする他意はなく、フラットな立場から国の財政事情を精査してみても、造作なく「国民へ還元する多くの税収増額分」が存在するわけではありません。(結果的に国債を追加発行するなど「ツケの先送り」となります)

ならばと、次に広島市などの「地方自治体」に目を向けてまいりますが、「歳入」(収入)から「歳出」(支出)を差引き、浮いた額を黒字として、表面上は“財政の健全化”を謳うことは可能ながら、実際のところ「借入金」(市債の発行)によって

調達した資金をはじめ、財政調整基金や減債基金など「基金」を取り崩して準備した資金も予算上では「歳入」に分類されます。

つまり、家庭でたとえるなら、何か事あるごとにローンを組み、また、一方では貯金を崩し、定期預金や各種の積立ても解約し、兎にも角にも財布の中身を厚くした結果、「なんとか1年間の家計簿では黒字になりました」といわれても…。やりくり大丈夫?って話。

勿論、自治体の運営には国の基準、ルールが設けられており、全国の自治体が、常に数字を“化粧で厚塗りしている”と指摘するものではなく、行政の“チェック機能”を果たす議会では、「表面に躍る数字や表現、言い回しの本質を見抜かなければならない」と此処に自戒を込めて発信している次第です。



Start Up

失敗などを一時的に取り繕う一手を「弥縫策」(びほうさく)と表現しますが、もし広島市行政の各所に弥縫策が散見されたなら?また、広島市が極めて深刻な財政危機に陥ったなら?それは、全て最終的な「OKを出す」権限を有する**議会の責任**であり、それだけ議会(を構成する議員)とは、**大事な機能**を担っています。



Next Page ▶



特集

Report 02

『サッカースタジアム誕生』～長い歴史をひも解く～

サンフレッチェ広島（以下：サンフレ）の初優勝が2012年11月。本市の都心にサッカースタジアムの建設が決定後、工事着工したのが2020年2月。そして、スタジアムが完成しては、指定管理者（向こう約10年間にわたり公共施設のスタジアムを管理・運営する民間事業者）のサンフレに引き渡される**2023年12月28日**が目前に迫ってまいりました。

そこで、今回は此処へ至るまでに存在した**糸余曲折**の伴う時代背景を凝縮しては、皆さまと一緒に振り返ってみたいと存じます。

はじめに「スタジアム建設を巡る一連の経緯」が紹介される場合、それが**一般報道**や議会への**行政資料**であっても、おおよそ物事の出発点は**「2013年」**に設定されているのが通例です。補足まで、**前者**では同年1月、県市へ行われた「スタジアム建設を求める約37万人の署名」報告を契機に据え、**後者**では同年6月の「サッカースタジアム検討協議会設置」を契機としています。

しかし、この**前段**に、スタジアム建設へ向けた様々なアクションがれっきとして存在した事実を皆さまはご存知でしょうか。

それは、既に歴史の波間に埋没した感は否めませんが、前記「2013年」を迎えるまでの約10年間となります、**ゼロから1に移行するまでの期間**が、念願成就へ向けて最も厳しかった苦闘の日々であり、裏を返せば「この期間に今日までの活動を支える礎が築かれた」といっても過言ではありません。

顧みれば、**2003年初旬**。サンフレ、サンフレ後援会、サッカー協会連名で県知事、広島市長宛に「スタジアム建設要望書」が提出され、続いて同年4月、前記サッカー関係の三団体によって**「サッカースタジアム推進プロジェクト」**が設立されました。

そして、知事、市長、商議所会頭を顧問に事務所も開設された後、青年会議所など各方面とも連携を図りながら約3年間にわたり、プロジェクト会議やワーキングスタッフ会議など、実現へ向けた研究・検討が幾度も重ねられます。

ちなみに、当初の建設候補地に挙がっていたのは、広島市民球場跡地、広島大学跡地、五日市地区、出島・宇品地区、商工センター、広島スタジアム（西区）、広域公園第一球技場、貨物ヤード跡地（JR広島駅横）、日本たばこ産業跡地（南区）の9カ所でした。

上記を踏まえ、「第一球技場を改修、利用しながら新スタジアム建設の候補地を選定していく」方針が打ち出されるのですが、結局、改修案は市からの合意が得られず、プロジェクトは、最有力候補地を当面、「五日市の産廃埋立地」に絞り込み、検討を深めることとします。

以降、1年以上にわたり五日市案をメインに据えて協議が進られたところ、これは、将来的な新スタジアムの行方を占ううえで「運命であった」といえるでしょう。五日市の埋立地については、産業廃棄物の受入れ“3年間延長”が確定し、プロジェクトは他の候補地を模索する道を迫られるのでした。

折しも、復興のシンボルでもあった広島市民球場が役目を終える2008年が近づいてきた、**2005年**。プロジェクト事務局は、「同市民球場跡地の活用策を決めるコンペ開催にあたり、サッカースタジアム案で参加しては？」と関係者より打診を受け、当然ながら前向きに準備を進めては開発プランを作成、エントリーを果たします。公募で寄せられたのは、市民アイデアが



378件に、民間からの事業者提案が26件でした。

今となっては、それから味わった二段階**“挫折”**が「プロジェクト休眠への入口であった」といえるかも知れません。

まずは、**2006年5月**。市の検討会議において、事業者からの26案が「11案」に絞られた段階で、プロジェクトの提案は落選してしまいます。関係者の落胆はいかばかりか。実質、此処で“プロジェクト解体”に近い状態に陥るのですが、しかし、諦めたら、そこで試合終了です。事務局は移転しながらも据え置かれ、関係者もプロジェクト継続を確認し合いました。

否が応でも時は流れ、ややもすれば、一丸となって取り組んだ、かつての情熱すら保つことの難しい暗中模索の日々の中、不意に1本のニュースが飛び込んでまいります。「市長選候補、選挙公約にサッカースタジアム建設」。**2007年4月**の市長選へ挑む、当時の現職であった候補者が先の公約を打ち出し、関係者は息を吹き返したように色めき立ちます。

しかし、選挙後。当選して現職に返り咲いた同氏は、「あの公約は、機運が醸成されて民間が動き出せば、そこを最大限サポートする意図であった」と前言に際して“大人の調整”をされたのでした。関係者の誰もが、眼前の事実を忘却の彼方へ追いやりよう努めた同年の春。実質、プロジェクトは有名無実化の休眠状態へ。

一方、時を同じくして、サッカースタジアム建設へ向けて別方面から新たな胎動が現れます。それが、手前味噌で誠に恐縮ながら、私たちの**市民活動**でした。

東京や海外でマイクを握っていた私が関係者の目に留まり、サンフレのホームゲームでスタジアムDJとして場内アナウンスを担当し始めたのが**2000年**。その頃のサンフレは、人口規模からも潤沢な運営資金を容易に望めない地方クラブとして、生き残る道に「選手を若手時代から育て、トップチームで起用する育成型」を掲げては実践。着実に成果も残しながら、しかし、**2000年代半ば**を迎えると、クラブの累積赤字は20億円に迫り、平日開催では観客2,000人なんて試合も珍しくはありませんでした。

私も運営に携わる一人として、サンフレの運営状況を環境の責任に転嫁することはなくとも、思い返せば、幼少の頃。「カープこども友の会」（昭和のファンクラブ）に入会しては、子どもたちで足を運んだ広島市民球場と広域公園とのロケーションの差異に改めて、「このままでは、サンフレと広域公園双方がジリ貧で共倒れになる」との思いが胸中、徐々に芽生えはじめたのが、**2006年頃**であったと記憶しています。

気がつけば、私は「新スタジアムを絶対に建設しなければ」との使命感に駆られ、一人で身勝手に候補地の調査を始めるなど、右も左も分からぬまま、夢の実現へ向けて**いち市民**として行動を起こしていました。



すると、しばらくして何の巡り合わせか、私が幼少の頃から通い詰め、高校球児の時には甲子園出場の夢が破れた最後の舞台、広島市民球場「解体」のニュースが飛び込んできます。平和記念公園に隣接し、灰燼に帰した街の復興に際し、常に都心部から希望の灯となり、人々の心を照らしてきたカープと市民の球場。「このスポーツ文化を継承するのはサンフレしかない」。私の目標が明確に定まった瞬間でもありました。

については、まず、仁義を切らなければなりません。関係者の



「彼は一体、何をいいだすのか？」半信半疑であったと容易に推察されますが、笑顔で快諾してくださり、あとは私も脇目を振らず、全速前進あるのみです。

例えば、資金調達一つにしても、当時、世界一の大富豪であったビル・ゲイツ氏の財団に協力要請のメールと手紙を送付しました。(財団からは「現在、第三国の教育支援に力を入れているので申し訳ありません」とお返事を頂きました)

一方、個人でできることなど知れどおり、仲間、同志を募らなければなりません。「目標達成へ最も賛同、協力してくださるであろう人々に集っていただこう」とインターネット等を通じて事前告知を行い、サンフレのホームゲーム終了後に市内的一角にあるホールを借りて、協力要請を含めた賛同者との**発会式**を催しました。

約40人の参加者からは多くの賛同をいただき、また、核となる10人ほどの実働隊が形成された後、幾度も会議を重ねながら、はじめに「県内のイベント・カレンダー」を手に、一定数の人々が集う催しに各班で出向いては、「都心部への新スタジアム建設」を趣意に、署名活動の開始です。

集まった署名の“初回”提出は、広島市へ**2008年11月**に「約1万300筆」。その後、絵図面なども作成、盛り込みながら、より方向性の確立された署名活動を新たに開始し、続いて集まった署名「約2万3500筆」を市議会議長へ**2010年3月**に提出いたしました。

また、この辺りの時期は、署名活動と並行して複数のアクションを展開しはじめ、その一つが、幾人ものサンフレ選手とスタジアム建設に向けた勉強(食事)会を催して、「試合後のインタビューや各種取材を受けた時は、とにかく『サッカースタジアムが広島にも欲しい』と訴えてくれないか」お願いしたところ、中心選手が口を開けば「欲しい!」「必要!」とのコメントを世に発信してくれました。

冒頭の「サッカースタジアム推進プロジェクト」の活動経緯と私どもの活動を照合してみると、何の偶然か**2007年**あたりを機に、まるで**リレーのバトン**のように受け継がれていることが分かり得ます。

そこへ加え、キーポイントとなるのは、ただ要望を訴えるのではなく「なぜ?」の部分を、ある意味で**社会問題化**しては、メディアにスポットを当てもらうことです。

試合会場への集客に尽力するも、ひとたび2万人が集まると「帰宅時にせよ1、2時間もどれだけ身動きが取れないのか?」「交通面では周辺地域へ如何にご迷惑をかけているのか?」「施設面ではJリーグ規約を満たしていない箇所がこんなにも?」等々、現行の抱える諸問題を広く発信、世間で認知してもらうべく、マスコミの友人知人にお願いしては、これまた徹底して取材、報道していただきました。

一方、都心部の金座街から本通り界隈のあらゆる店舗を一件ずつ訪ねて



は、地道にサッカースタジアム誕生がもたらすメリット等の説明を続け、行政担当にも建設を求める直談判にと市役所へ出向いて熱弁を振るい、ホテルの会合に出席中の市長に会いにいき、建設を目指す趣意書を直接、手渡したこともありました。

加えて、スタジアム建設の理解、賛同を広範からも得ようと、当時の現職議員や専門家をコメントーターに招致しては、各所のホールや民間スペースで大小、幾度ものシンポジウムを開催するなど、あらゆるアプローチを実践。補足までに、私が「選挙で初当選を果たす**2011年4月**」以前に取り組んでいた“市民活動”時代の話です。

そんな「政治の世界」など眼中になかった私が、前記**2011年4月**の統一地方選挙に立候補した背景には、何年間も夢の実現を目指して活動を継続。同志と共に下地は着実に築けたものの「なかなか現実味を帯びてこない」もどかしさにシビレを切らし、最も現状で欠いていたのが**政治力**であったことを痛切したゆえ、市外に暮らしていた私が選挙の半年前に市内へ引っ越ししてまで立候補したのが実際でした。

そして、「都心部にサッカースタジアム誕生」を選挙公約に掲げ、お蔭様で初当選が叶うも、選出された区役所には「サンフレッチェは安佐南区の宝です」との大きな懸垂幕が掲示されています。私が「区の宝を県域の宝にまで昇華させなければ、愛するクラブ自体を失う可能性があるんです！」と訴えたところで、相当の非難を浴び続けました。

議会活動でも同様。私が自身初めての本会議場で「都心部へのサッカースタジアム建設」を訴えた際も、そんな空気感や将来展望など議会や行政内の何処にも存在せず、先輩議員からは「石橋くん、広島市にサッカースタジアムなんて、奇跡でも起きない限り絶対に無理だよ」と嘲笑され、売り言葉に買い言葉で、「先輩! 奇跡は信じる者にしか訪れませんので見ておいてください!」と思わず語気を荒らげるなど日常茶飯事でした。

いずれにせよ、政治の舞台に身を置いてからは、クラブと行政を固く結びつけるべく、高い障壁を超えて物事を前進させるべく、星の数ほどの“舞台裏”が存在しますけども、言わずもがな、本会議や委員会での提言、要望などの活動は数知れません。議会内で「公共交通機関を利用して広域公園に足を運び、浦和レッズ戦を観戦して、どれだけアクセスが大変であるか体感しよう企画」を実施しては、自身3回目となる“署名活動”も打ち出し、この時は、冒頭にも触れましたが「約37万筆」もの署名が集まりました。

旧市民球場跡地活用策にスタジアム案を持ち込み、ひとたび「南区の宇品がスタジアム建設の最適地」と県市が決定を出せば、そこを引っ繰り返すために、あの手、この手と…。思い出は尽きず、全てを克明に記すには、あまりにも紙幅が足りません。

この度の特集の結びに、広域公園では観客席とピッチの距離が最長で30mあり、観客席を覆う屋根も全体の約5%に留まつていましたが、観客席全体が屋根に覆われ、歓声や観客の熱量が反響し、かつ、観客席とピッチの間に陸上トラックが存在しない**新スタジアム**の素晴らしさを、あらゆる人々に是非とも経験していただきたく、翻り、過去13年間にわたり新スタジアムの建設と並行して訴えてきた「広域公園のさらなる利活用」も引き続き確立してまいりたい所存です。深謝





「サッカースタジアム建設の推進について」～画竜点睛を欠くべからず～

決算特別委員会は前年度の事業内容や決算額を審議しては新年度に反映させる大事な機会です。

石橋：いよいよスタジアムの完成が2か月後に迫りましたが、ここで安堵するわけにはいきません。また、近年のスタジアム事情は、とかくボルダリングや温泉、飲食など「付帯施設の充実」に注目が集まりますが、メインとなる**良いピッチ（芝生）環境**で良いゲームを重ねこそ“ホームスタジアムの価値”が確立されますので、本日は「芝と運営」をテーマに質疑、発言してまいります。

ドイツのクラブ、シャルケ04が所有するスタジアムは、22年前に建設費“約230億円”で誕生していますが、数年前には早々に「建設費を回収」しており、その理由は、「サッカー以外の多様な催し」で多額の収益を上げ、一方では「天然芝の維持管理費」を徹底して抑制していることが挙げられます。

そこで伺いますが、昨年度の新スタジアム整備実施額の中で、**ピッチの芝生整備**（完成前の準備）では何に取り組まれましたか？

答弁：市内に確保した試験場で「芝生の生育試験」を令和3年度から翌年度にかけて実施しました。また、広島の気象条件に合わせ、本スタジアムの日照、温熱および通風を解析できるシステムでシミュレーションを行い、本スタジアムで適切に芝生の生育ができることを確認しました。

石橋：ここに参考まで、スポーツの本場“米国”的アメフトやバスケ、野球のスタジアムにせよ、巨大スポンサーによる「民設民営」のイメージが強いところ、実際、その“過半数”は自治体が建設して所有する**公共施設**です。さらに、米国の自治体ではスポーツ施設を、イノベーションの創出や社会の課題を解決するための「プラットフォーム」に位置付けており、各施設からの“過度な収益”を求めていません。しかし、下世話な表現ですが「稼げるスタジアム」に越したことはありませんので、話を本市に戻します。

広域公園のEスタジアムにおけるピッチの「芝の全面張替え」を振り返ると、1992年の開業から今日まで、全面張替えは1998年と2016年の**2回のみ**。約30年間で全面張替えの諸費用が大々的な土壌整備を含めて**約3億円**で済んだ理由というのは、同スタジアムを見れば一目瞭然ですが、「良好な日照と通風環境」のお蔭に他なりません。（管理者のご尽力は当然として）

補足まで、鳥栖のスタジアムは1996年の開業より、芝の全面張替えは2014年の**1度だけ**で、こちらも良好な日照と通風環境が保たれ、埼玉スタジアムも2001年の開業より、全面張替えは2020年の**1度だけ**ですが、芝の下部に設置された「冷暖房」が芝生の維持管理を多大にサポートしており、目安として、芝の全面張替えに要する諸経費は現在、1回**「6000万円」**くらいが相場とされています。



答弁：スタジアム調整担当課長&工務担当課長

では、本市が新スタジアム建設にあたり参考とした「神戸や吹田（大阪）」のスタジアムの場合はどうでしょうか。神戸は2001年の開業より、ピッチ環境は常に**日照不足と通風不良**に悩まされ、2015年～18年には**計6回**の全面張替えを行い、2022年には“ハイブリッド芝”へと4年ぶりに全面改修しています。（ハイブリッド芝：天然芝全体

のうち5%ほど「人工芝」を織り交ぜた芝）

吹田は2016年に開業した近代スタジアムですが、ピッチ「南側」の芝を**“毎年”**張替え、



2年毎に全面を張替えていますが、南側に関しては、日光を“南側の屋根”が遮り**「十分な日照が得られない」**環境に起因しており、この辺も考慮して、京都や新国立競技場などの最新スタジアムは南側屋根にクリア（透明）な素材を用いて**「透視化」**を図っています。

しかし、京都は本年、**シーズン中**に南側の芝を大々的に張替えており、本市の新スタジアムとフォルムが似ている名古屋のスタジア

ムにしても、開閉式の屋根を近年、「開けたままの状態」に改修し、日照・通風・南側屋根によって生じる日影の改善が図られながら、**毎年**のように芝の全面張替え



が行われているのが実情です。

そこで伺います。名古屋では行政が、吹田（大阪）では指定管理者のガンバ大阪が芝の全面張替え費用を負担していますが、本市の新サッカースタジアムで**芝の全面張替え**を迫られた場合、費用は誰が負担することになるのでしょうか。

答弁：長期修繕計画に基づく定期的な芝生の全面張替えについては、本市において負担することになります。

石橋：最新技術の粋を結集させた本市の新スタジアムですから、芝の維持管理についての**危惧**にせよ、私もイタズラに不安を煽りたいわけではなく、「杞憂に終わる」に越したことはありません。ただし、芝生とは生き物で、人知の及ばぬ天候とも密接に関係するにあたり、本市特有の**「夏場の嵐」**は決して侮れないでしょう。

については、天然芝の状況悪化を放置することはケガ等々、選手生命にも直結してまいりますので、ピッチコンディションが悪化

した場合は迅速な改修、対応をここに求めておきますがいかがでしょうか。

答弁：指定管理者において、トップレベルの選手がパフォーマンスを十分に発揮できるよう良好な芝生環境の維持に努めています



が、天然芝の状況が悪化した場合には、その要因を踏まえ、指定管理者と協議の上、適切に対応いたします。

石橋：新スタジアムの建設に際し、

私も過去13年にわたり行政へ無数の提言を行ってまいりましたが、いよいよの完成までには、今回が「締め」の発言機会になるか存じます。

現在、Jリーグでは、「世界に伍するクラブを誕生させよう」と、各クラブの成績に応じた分配金一つをとっても「強いクラブには、より多額の分配を」掲げ、プレミアムな人気クラブの育成に着手しており、一つ下のカテゴリーとなる「J2」への分配金は今後、相当の割合で削減されていきます。

私もスタジアムでのアナウンス担当時、2度の「J2降格」を経験しましたが、ひとたび降格してしまうと、「トップ選手がクラブを離れ→観客も減少→スポンサーが離れていく」負のスパイラルに入りましては、「向こう何年間もJ1に戻ってこられない」なんて現実も想像に難くありません。

サンフレはJリーグ興行で“30年の経験”を有しますが、スタジアムを管理・運営する指定管理者としては一年生であり、新スタジアム渡し後は「行政が指定管理者（サンフレ）のサポーター」となりて、

アシストを決めていただきたいと切望するモノですがいかがでしょうか。

答弁：本市としましても、スタジアムの管理運営にあたっては、指定管理者と密接に連携を図り、業務実施状況に応じて必要な助言などを行っていきたいと考えています。

石橋：2012年にサンフレがリーグ初優勝と遂げた後、平和記念公園で「優勝報告会」が行われ、6万人以上の方々が集ったのですが、その時に私は司会を務めさせていただきました。

78年前、一面の焼け野原となった場所に、サンフレの優勝によって“あれだけの笑顔”が生まれたのは、やはり「スポーツの素晴らしさ」であって、結びに、マイクを握る私の前には“いかなる光景”が広がっていたのか当時の写真をお届けします。（委員会室のモニターに写真を上映）



引き続き、皆さんで一丸となり、スポーツ「も」を通じて、見事に復興を遂げた究極の国際平和文化都市を築いてまいりましょう。

以上です。

Report 04

Blast from the past 過去の思い出深い出来事

Episode I 明日のトラム(新交通)ライン「新白島駅」

本市にも法律に基づいて、都市計画に関する事案を定期的に調査、審議する「都市計画審議会」が設置されていますが、計画を策定するにあたり肝要となるのは、将来（中長期）的に都市は如何なる変貌を遂げ、そこを見越しては現在、如何なる手を打っておくべきかの「先見の明」となります。

付言すれば、政治とは「今の大衆ニーズ」に応えるばかりでなく、時に反対の逆風にさらされようと「未来のために」英断をくださなければならぬケースにも遭遇するもので、議員には常に慧眼（けいがん：物事の本質を見抜く洞察力）と責任の伴う政治判断が求められており、加えて、まちづくりの知見を有する行政マンとの連携も欠かせません。

そこで、今回は行政マンの「先見の明」が奏功した事業の一つ、アストラムライン（以下：アトム）の「新白島駅」にスポットを当ててみます。

顧みれば、1990年初頭。「JR山陽本線と将来的に開通するアトムを白島エリアで結ぶ」構想は存在していたのですが、結局は別会社でもある双方の間で合意には至らず、構想自体も頓挫した形で1994年、アトムは開業を迎えます。

しかし、利害関係と人間模様が渦巻く開業前の工事段階において、市民生活（利便性）向上のため、いつか双方の路線が「必ずや結ばれる日が訪れる」と見越し、当時のアトム建設を担当した市職員は、あの勾配のついた場所へ「いつでも駅舎が建てられる」よう、最大限の水平エリアを確保しておきました。

そして、「布石」とも呼べるその一手は、約20年後（2015年）に「新白島駅誕生」として実を結びます。

「行政マン冥利に尽きます！」「素晴らしい秘話だと思われませんか?!」

前記の担当職員さんが破顔一笑、定年間際に私へ自慢げに語られていた光景が今、懐かしく思い出されます。





Report 05 2023(令和5)年度 『9月議会』一般質問

発
言
項
目

「核兵器廃絶へ向けて」～核兵器の増加に転じた今こそ明確な目標設定を～

「幾度も平和記念資料館へ」～ここを訪れた後、核兵器を肯定する人はいない～

「原爆供養塔納骨名簿」～今一度、一人でも多くの目に触れていただきたく～



「核兵器廃絶へ向けて」～核兵器の増加に転じた今こそ明確な目標設定を～

【前提】 東西冷戦後より確実に減少してきた核兵器も近年、各国が軍備の近代・拡大化を進めた結果、昨年は運用可能な核兵器が「増加」に転じた。また、今後も確実に増え続ける兆候にあり、ストックホルム国際研究所は「世界は危険な局面に入りつつある」と大きく警鐘を鳴らしている。

過去には総理も「日本は核兵器禁止条約の交渉の場へ加わるべき」と政府内で示されながら、関係者から諫められては実現に至らず、こうした背景が総理自身も口にされる「核廃絶へは急がば回れの精神で臨むが肝要」とのスタンスに繋がっているのは想像に難くありません。

しかし、先だって後進へ道を譲られた長崎市の“田上”前

市長は、被爆の方々の年齢も熟慮し、「核廃絶の目標へ我々は最短距離を歩む」との活動を貫かれました。

また、G7広島サミットでも、世界中の市民社会組織が集まる公式団体「Civil7」(C7)からは、「核廃絶へ向けた具体的なプロセスと“目標年次”を示して欲しい」との声が多くの方を中心におかれています。

広島市長が議長を務める平和首長会議でも「核廃絶への緊急提言」として、まずは過去の「2020ビジョン」のように目標年次を改めて設定すべきと考えますが、ご所見をお聞かせください。



PXビジョンを通じて核廃絶への環境づくりを着実に進めたい。

市民局長

平和首長会議が令和3年に策定したPXビジョンでは、核兵器のない真に平和な世界の創造に向けた思いを国際社会の総意に高めることを目指し、「平和文化の振興」を目標に掲げたところで、加盟都市も目標の1万都市に達していない現状、目標年次を定めることさえ難しい中で、前例にならって定めることは、一刻も早い核廃絶を訴えられている被爆

者の方々に不誠実な対応をすることになりかねません。

したがい、PXビジョンに掲げる目標の実現に向け、ビジョン下で取り組む具体的な内容を行動計画に盛り込み、取組の成果を確実にあげては、核廃絶に向けた環境づくりを着実に進めていきたいと考えます。



例えば、あくまで方向性レベルながら「2045年を核廃絶の目標に据える」「県の提唱」こそ、平均年齢85歳を迎えた被爆の方々を失望させる物言いであり、私も世界情勢（相手国）あってこそ厳しい軍縮は理解していますが、過去より「被爆の方々がご存命の間に希望の道筋を届けられる目標年次を設定すべき」と訴えてきました。「目標を見出し、力を合わせれば必ずやたどり着ける」と人々が自認すれば、それは確実な「行動変容」につながっていきます。今こそ、国境を越えた加盟都市で形成される平和首長会議が既成概念を打ち破る時です。



「幾度も平和記念資料館へ」～ここを訪れた後、核兵器を肯定する人はいない～

【前提】 ひとたび平和記念資料館を訪れ、忚分の時間を費やし、幾つもの展示品と語り合った後に「核兵器の発射ボタンを押せる人間は存在しない」と私は断言できる。“被爆の実相”を痛切していただくためにも未来永劫、国内外から一人でも多くの人々に平和記念資料館へ訪れてほしいと熱望する。

私も一人の広島市民として「決して忘却はならぬ」と長年にわたり平和記念資料館に通い続け、また、地元民をはじめ国内外の人々と資料館のアクセシビリティ（近づきやすさ）を高めるべく、今日まで数々の提言を重ねてきた次第です。

そこで、関連報道に目を向けてみると、本年8月6日の新

聞各紙では「サミット翌月、5万人超」「入館者 最多ペース」等々、G7サミット効果により、国内外から多くの来館者が訪れている模様が報じられました。

しかし、1週間後のお盆休み辺りでは一転し、紙面では「原爆資料館 大混雑」「入館に2時間待ち」等々、せっかく遠方よりお越しいただきながら、長い行列の待ち時間に暑さも伴い、待機列の途中、平和公園を後にする多くの人々の模様が報じられ、ここに改めて「訪れてくださった人々の入館がスムーズに叶うよう」何か対策を講じるべきと切望しますが、市のご所見をお聞かせください。



更なる対応策を考えていくこととします。

市民局長

本年5月のG7広島サミット後、これまで以上に平和記念資料館への関心が高まり、来館者が増えることが予想されたため、サミット閉幕の翌日から8月末まで、開館時間を1時間延長したところですが、8月中旬に、長時間の入館待ちが生じたことから、当面可能な対応として、チケット販売

窓口職員の増員や入館待ち時間の資料館ホームページでの広報など対策を講じたところです。

この対策により、一定の効果がありましたがあ、待ち時間の解消には至っていないことから、来年度に向けて、更なる対応策を考えていくことといたします。



現在、世界を取り巻く安全保障の議論では「核廃絶は究極の理想だが、現実的に今ではない」と、此処へ集約されてしまいますが、かつてのキューバ危機や昨今のウクライナ侵略を持ち出すまでもなく、まずは核兵器が存在する限り、意図的、偶発的を問わず使用の可能性は必ず残されます。

ひとたび核爆発に至れば、全身に多量の放射能を浴びた負傷者の治療に、どこの国、どの医療体制が迅速にあたられるのか？大量の放射能に汚染された戦地へ可及的に速やかに、如何なる規模で救助へ向かえるというのか？

「核抑止が国家間の大戦を防いできた」というのは立証ではなく、あくまで“モノの解釈”であり、世界の為政者は、國家、国籍を超えて、あらゆる「人類」を守らなければなりません。



「原爆供養塔納骨名簿」～今一度、一人でも多くの目に触れていただきたく～

【前提】 通訳ガイド曰く、南アフリカやケニアから平和公園に訪れる人々の中には、未だ地下に眠る遺骨に際して「このままでは失礼で、死者との対話もできないから」と靴を脱がれる姿を見るとのこと。公園内の原爆供養塔に安置されている約7万柱の遺骨のうち、氏名等が判明しながらも未だ遺族が分からぬ遺骨813柱が存在している。

本市では1955年から原爆供養塔に納められた「氏名が判明しながらも引き取り手のない遺骨」の氏名を毎年、公開しており、皆さんも役所や公民館等で何百人も記名された告知ポスターを目にしたことがあるかと存じますが、年々、引き取り手の判明が困難になっています。

我々は、とかく「未来思考」を掲げ、思いを次世代に傾

斜させてしまいますが、確かに過去の先人が「今」を形成してくださっており、亡くなられた方々への畏敬の念を忘れてはならず、また、氏名が判明しながら、遺骨が遺族のお手元へ戻れない、故郷の地へ帰れないなど、現世に生かされる我々として、これほど心苦しい状況はありません。

被爆から78年が経過し、今後ますます“遺族探し”が困難を極めようとも、今一度、何とか遺骨と遺族が結ばれるよう、原爆供養塔納骨名簿の周知、その強化を図っていただきたいのですが、市のご見解をお聞かせください。



周知の一層の強化に努めてまいります。

市民局長

本市では、原爆供養塔納骨名簿を毎年作成しており、この名簿を全国すべての自治体や各都道府県の被爆者団体などに送付し、掲示を依頼するとともに、報道機関への情報提供をはじめ「ひろしま市民と市政」や市ホームページ、SNSなどの広報により、広く周知に努めていますが、名簿に関する問

い合わせは、年々少なくなっているのが現状です。

このため、今後新たに、国内に点在する平和関連の施設や団体等に名簿の掲示を依頼するとともに、様々な広報媒体を活用した周知の一層の強化に努め、一人でも多くの遺族の判明につながるよう、取り組んでまいります。



原爆供養塔名簿は、広島市のホームページでもご覧いただけます。一人でも多くの方々に是非。



Report 06

BACTSTAGE
進展の舞台裏

Episode II

「シビックプライドの醸成」～オリジナルナンバープレート～

全国津々浦々に原動機付自転車や自動車の「ご当地オリジナルナンバープレート」が誕生しては街中でも見かけるようになって久しい昨今。ご多分に漏れず、広島市でも本年10月23日から広島東洋カープのマスコット「カープ坊や」がデザインされた図柄入りナンバープレートの交付が始まりました。

この日は、沖縄県や秋田県など、全国10地域で各々のご当地ナンバーが一斉交付されたのですが、約1か月前からの事前受付では「カープ坊や」の申込数が日本一。改めて「さすがのカープ人気」を全国に示したのは記憶にも新しいところです。

そんな“ご当地ナンバー”的歴史を遡ると、2018年10月の「自動車用」導入以前から交付されていた「原付用」は、2007年の愛媛県は松山市が発端でした。

地元の誇る観光スポット“道後温泉”的PRも兼ねて、ナンバー表記を松山市から「道後・松山市」へ変更。また、小説「坂の上の雲」と縁が深いことから、プレートもモクモクとした「雲」の形状をかたどるなど、松山市は「地元の魅力を再認識し、活性化を目指す意味があった」とされます。

そして、私が初当選した後、上記の事例を加味したうえで、例えばハワイは「レインボーステイト」（虹の州）と呼ばれ「虹」が、

ニューヨーク州では「自由の女神」が描かれているなど、ご当地ナンバーには地元民の“郷土愛”醸成に加え、域外からのリピーターにも「再びその地を訪れた」懐かしさと感動を届けられると思い立ち、委員会の場で「広島市でも導入すべし！」と提言。(当時から「サンフレとカープのデザイン」の見本も自らで作成して市へプレゼン)

行政も検討を深めてくれては「2014年10月」の導入に至り、気になるデザインの行方は一般公募を経て、現在の「はと」ナンバーが誕生しました。

「丁度、目の部分がビスと重なって良かったね♪」なんて言うてる場合じゃありませんが、郷土のみならず、議員活動にも「歴史あり」です。



2014年8月から交付開始の原動機付自転車用、伝説の「オリジナルナンバープレート」



2014年10月23日から交付開始の広島版図柄入りナンバープレート
※新車に限らず、使用中の「車でもナンバーを変更することなく交換できます。」



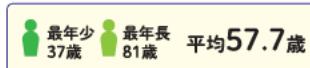
Pick up

『古今市議会データ』比較 ~確実に押し寄せる変化の波~

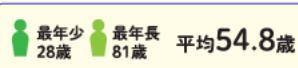
世の移り変わりが激しいことを「10年ひと昔」などと申しますが、広島市議会も同様ですので、今回は、私が初当選して任期の始まった「2011年5月」と今春、4期目の任期開始となった「2023年5月」時点の議会データを幾つか比較してみます。

議員の平均年齢等

2011年(平成23年)



2023年(令和5年)



平均年齢は3歳ほど若くなっていますが、特筆すべきは「28歳の現職」が誕生している事実。時代は変わりましたね。一方の最高齢に関して書き綴るには、あまりに紙幅が足りません。

議員の平均任期

2011年(平成23年)



2023年(令和5年)



丁度「1期の4年間分」減っています。前向きにも後ろ向きにも捉えられますが、4年の間に議員の成せることは非常に多く、私見をいえば、経験値(知見)「マイナス4年ポイント」でしょうか。

女性議員の割合

2011年(平成23年)



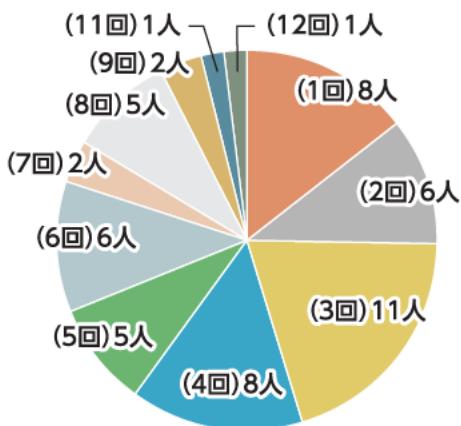
2023年(令和5年)



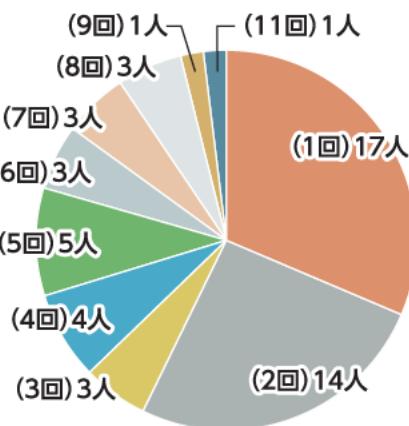
長年にわたり「9人に1人」の割合が続いていたので、そこは立候補者と有権者が「打破した」といえますが、極言すると「女性が10割」でも構わないわけで、真に問われるのは実行力です。

当選回数別の議員数

2011年(平成23年)



2023年(令和5年)



この12年間で、数字上でも実務的に最も「激変した」のが、こちらのデータです。現行では1期の新人議員が議会全体の約「3分の1」を占め、そこへ、2期の議員を加えると、ゆうに過半数を上回ります。私は、当選回数の少ない議員を「いつまでも新人」と断じるつもりはなく、一方、当選を重ねた議員を自動的に「ベテランで有益」とも捉えませんが、自らを棚上げした物言いに恐縮ながら、広島市議会は過去12年間で著しく、チェック機関、議決機関としての機能が低下しており、早急なる全体の底上げが必須です。

1484 Information

いしばし案内所

バックナンバーのご案内

市政報告書のバックナンバー(PDF)は「石橋りゅうじ 公式サイト」で検索または右記QRコードから

※QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

2022年 新春号

2022年 岐末号

2023年 新春号



あとがき

今回の市政リポートは、まるで「新スタジアム特集号」の様相を呈しており、「そこ」を否定するつもりはありませんけども、他方、私が過去の本会議や委員会の場で熱を込めて取り組んできた分野の一つに“教育”があり、やはり「教育が国の未来を形成する」といっても過言ではありません。ゆえに、表紙のタイトルバックが「黒板」になっているのは、当初より、こうした意図がありました♪

しかし、その現場を司る「教師」にスポットを当ててみると、年々教員免許を取得する学生が減少傾向にあれば、ベテラン教員の大量退職、公務員削減の流れにより正規教員の人数的な抑制が進むなどの時代背景も手伝い、「先生不足」の実情は、今や広島市の現場に留まらず、国が抱える大きな問題となっています。

私も、教員が限られた時間の中で児童生徒と向き合う時間を確保できるよう、学校における教員を取り巻く働き方改革を訴えてきましたが、未来を担う子どもたちのためにも、年中が「師走」となっている教育現場の速やかなる環境整備は必須であり、引き続き、熱量を持って取り組んでまいる所存です。

新しい年に更なる希望を馳せるところ、どうか皆さんにおかれましても、良い年をお迎えください。

石橋りゅうじ (2023年 岐末)

本リポートは規定により政務報告以外の内容は掲載できませんので、何卒、ご容赦ください。

新政クラブ

発行者 ■ 石橋りゅうじ

〒730-8586 広島市中区国泰寺町一丁目6番34号 石橋りゅうじ 議会棟控室 / Tel.(082)504-2442 / <https://koeya.com/>